



みやぎの先人集

みやぎの先人集 未来への架け橋

未来への架^かけ橋

宮城県教育委員会

みやぎの先人集「未来への架^かけ橋」

発行 宮城県教育委員会

〒980-8423

宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号

平成25年3月発行

宮城県教育委員会

みやぎの先人集

未来への架^か木^かけ橋

みやぎの先人集「未来への架^か木^かけ橋」は、江戸時代や明治時代に活^{かつやく}躍した宮城県にゆかりのある人たちの生き方をまとめました。

道徳の時間やそのほかの時間に読んで、先人の生き方に学びましょう。

発展のページには、本文にのっていない先人も紹^{しょうかい}介しています。興^{きょうみ}味を

もった先人について調べてみましょう。

みやぎの先人集 「未来への架け橋」

目次

●	片平	観平	―白石の町の水を豊かに―……………	1
●	櫻井	喜吉	―わけへだてなく命を救う―……………	5
●	高山	善右衛門	―ふるさとに豊かな大地を―……………	9
●	高山	開治郎	―桜並木を後世に―……………	13
●	河村	瑞賢	―東廻り航路を拓く―……………	19
●	芦	東山	―自己の生き方をつらぬく―……………	23
●	慶念		―子どもの幸せを願って―……………	27
●	鎌田	三之助	―沼地を豊かな土地に―……………	31
●	佐々木	君五郎	―植林を進め、洪水を防ぐ―……………	35
●	二階堂	トクヨ	―女子体育を広めて―……………	39
●	川村	孫兵衛重吉	―北上川の流れを変える―……………	43
●	大槻	俊斎	―多くの人に新しい医療を―……………	49
●	内海	五郎兵衛	―命と生活の架け橋をつくる―……………	53
●	及川	甚三郎	―夢を追い続ける―……………	57
●	フランク	安田	―イヌイットを救う―……………	61
●	秀ノ山	雷五郎	―小さな体で大横綱に―……………	65



● 落合 直文

― 短歌を多くの人に広める ―

69

● 林子平

― 志あれば必ず道あり ―

75

● 青柳 文蔵

― 日本最初の公開図書館をつくる ―

79

● 大槻 磐溪

― 開国を唱えて ―

83

● 富田 鐵之助

― 日本の製品を世界へ ―

87

● 一力 健治郎

― 東北の発展を願って ―

91

● 酒井 げん

― 女性の美しさを求めて ―

95

● 志賀 潔

― 赤痢菌を発見する ―

99

● 本多 光太郎

― 新しい金属をつくる ―

103

● 土井 晩翠

― 新しい詩の世界を開く ―

107

〈読んでみよう〉

● 伊達 政宗

― 仙台藩を豊かな地に ―

113

● 支倉 常長

― 粘り強く役目を果たす ―

117

● 大槻 文彦

― 本格的な国語辞書をつくる ―

121

● 佐藤 清右衛門

― 暴れ川と闘う ―

125

〈資料〉

発展のページ(みやぎの先人百一人)

.....

129

先人が生きた時代

.....

131



片平 観平 — 白石の町の水を豊かに —

今から約二百年前の江戸時代後期、片倉家の治める白石の町は、大雨のたびに白石川が氾濫し、人々は水害に苦しんでいました。

当時白石では、白石川より二十メートルも高い所にあった町の中に水を引くため、川に堰を作っていた。水をせき止め、水位を上げて用水路に流す方法を取っていました。それが、蔵本村大堰です。しかし、その方法は土嚢を積み上げ、くいでとめるといった簡単なものでした。大雨が降ればひとたまりもありません。堰は押し流され、堤防がこわれ、大堰の周りの家や田畑が水びたしになりました。そうなる

と白石川の用水路しか水源のない下流の町の人々は、毎日の飲み水や洗たくなどの生活用水にも大変不自由しました。

また、いったん火事が起きると消火のための水もありません。人々は不安な日々を過ごすしなければなりません。そして、何より農業用水が不足し、農作物もとれなくなってしまいます。凶作が続いたその当時、堰がこわれるということは、白石の人々にとっては、命にかかわる大きな問題でした。しかも、洪水は数年に一回、ときには一年に二度も起こることがありました。そのたび、堰の修理にかり出される人々の苦労も大変なものでした。

「堰がこわれたぞ。」

「また、田んぼがやられてしまう。」

「町にもどろ水があふれてくるぞ。」

その様子を見て、片平観平はつぶやきました。



工事前の蔵本村大堰と用水路

土嚢：
土をぎっしりと
めたふくろ。

「また農民がづらい目にあう。」

観平は、片倉家の家臣として産業を盛んにする仕事をしていました。大雨のたびに農作物の不作や、何度もくり返される堰の工事に苦しむ農民の姿を目の当たりにしていた観平は、何と人々を救うことはできないものかと考えていました。

「大堰ばかりにたよらずに、白石川の水を引くことはできないだろうか。」

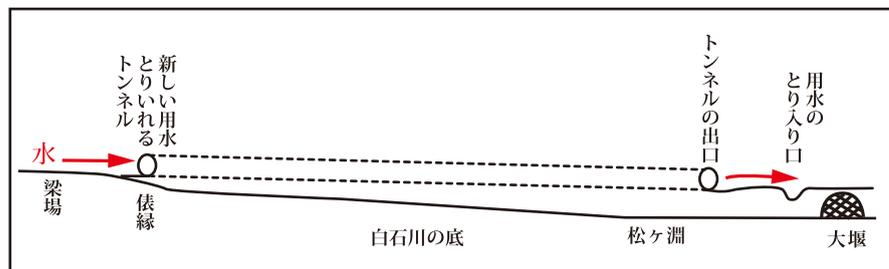
天保元（一八三〇）年、六十歳を過ぎ、すでに隠居の身だった観平は、蔵本村大堰の改修工事をすることを決意し、領主に願い出しました。計画は、当時の大堰の上流にある俵縁から松ヶ淵にかけて、白石川の右岸の岩かべに隧道（トンネル）をほり、白石の町に水を引こうとするものでした。隧道があれば、大雨が降っても、大堰がこわれても生活などに必要な水に困ることはありません。しかし、岩をほり進めなければならぬその計画は、当時の工事の技術からするとかなり難しいものでした。

また、工事を進めるにはお金が必要ですが、当時の片倉家は財政的に大変厳しい状態にありました。観平は考えこむことが多くなりました。

「資金がないのなら、わたしがお金をすべて出します。ぜひやらせてください。」

と観平は領主に申し出ました。観平は自分の財産を投げうってその費用にあてようと考えたのです。そして、息子の友英とともに工事にあたりました。

機械などまったくなかった当時のこと、槌とのみだけの手作業でほり進める工事は、困難を極めました。また、ほった岩くずを隧道から運び出すことも大変な作業でした。天保二（一八三一）年には蔵王が噴火し、その夏には洪水にもみまわれました。隧道は何度もくずれ、そのたびに工事はやり直しになってし



隧道の横図

隠居…
仕事をやめたり、跡取りに家の権利をゆずったりして引退すること。

槌…
柄のついた物をたたく道具。

まいりました。また、工事に取りかかったところは、東北地方で大飢饉が続いた時期で、
飢えで死ぬ人が増え、人口が半分に減ってしまう村が出たほどでした。

「また、飢え死にしたものがでたぞ。」

「食べるものが何もない中で、どうして工事などすることができよう。」

人々はたび重なる災害にうちひしがれていました。食べるものも足りない中で
は、隧道工事を続けるなど、とうてい考えられない状態でした。工事をする人夫
を集められず工事が遅れてしまうこともありました。

「これ以上はとても無理だ。」

「もう工事は中止した方がよいのではないか。」

そうした声が観平の耳に入ってくるようになりました。さすがの観平もしばら
く考えこんでしまいました。

(こんなときだからこそ、ここでやめるわけにはいかない。この工事は、白石の人々を救うことになる)

観平はこう自分に言い聞かせました。

観平は、息子の友英と力を合わせてさらに工事を進めていきました。片倉家も領民一人当たり一日二合のお
助け米を配り、人夫を集めやすいよう工事の後押しをしました。工事を始めてから十年になろうとしたころには、
観平は財産のほとんどを使い切ってしまった。それでも借金をしてまで工事を進めました。

ところが、もう少しで隧道が完成するという日、白石はまたしても大雨にみまわれました。

(この大雨でまた隧道がくずれてしまわなければよいが)



飢饉…
農作物が実らず、
食物がなくなり
飢えに苦しむこと。

二合…
茶わん四はいくら
い。

お助け米…
家臣を助けるため
に、家族の人数に
よって与えた米。

観平は、気が気ではありませんでした。

翌朝、観平は急いで隧道に向かいました。観平は目を見張りました。大雨で水が勢いよく流れこんだため、なんと隧道が貫通していたのです。

観平は、しばらく流れこむ水を見つめていました。

隧道の長さは約二百五十間（約四百五十メートル）にもおよぶものでした。着工から十年が過ぎ、観平は七十歳になっていました。

観平は、七十一歳で亡くなりました。観平の偉業は、白石城下の神明社の大鳥居のすぐ左側に建てられた石碑によって、後世に伝えられています。

観平が完成させた蔵本大堰切通トンネルは、白石の人々から親しみをこめられて「切通」と呼ばれています。切通から流れる水は、白石の町の中の水路に引きこまれています。初夏には、この水面に澄んだ清い水にしか咲かないといわれている梅花藻という梅の花に似た、かれんな花が咲いています。今でも年二回の「川干の日」には、観平の志を受けついで市民の手によって水路のそうじが行われ、きれいな水の流れを守る努力が続けられています。



切通の出口

片平 観平

片平 観平は、江戸時代の終わり、片倉家に仕えた。観平は、水害に苦しむ白石の人々を救うため、私財を投げうって治水工事を行った。その後、十年の年月をかけ苦難を乗り越えて「蔵本大堰切通トンネル」は完成した。地元白石の人々は、これを「切通」と呼び、現在も大切に利用している。



片平翁の石碑

偉業：
すぐれた仕事。

後世：
後の時代の人。

川干の日：
水底の土砂や岩石をさらい、川をきれいにする日。

櫻井 喜吉 — わけへだてなく命を救う —

櫻井喜吉は、槻木村（現在の柴田町槻木）で診療所を開いていました。

ある夜のことでした。

「喜吉先生、開けてください。どうかこの子を、ミヨを助けてください。」

すがりつくようなその声に目を覚ました喜吉が戸を開けると、一人の母親が飛びこんできました。月明かりをたよりにのぞき

こむと、背中に小さな女の子をおぶっていました。母親の名はセツ。どうやら、船迫（現在の柴田町）から約三キロメートルあまりの夜道を歩いてきたようです。そのころ、船迫では病気が流行していました。さっそく診察室に招き入れ、横たえたその子の脈をとりました。喜吉は、すぐさま手おくれであることに気づきました。落ちくぼんだまぶた、小枝のようにやせ細った手足、とぎれとぎれの脈。手のほどこしような状態でした。診察の様子を見ていたセツが、

「先生、ミヨは、もう助かりませんか。」

と、不安そうに問いかけました。

「残念だが、もう少し早かったらなあ。」



櫻井 喜吉

その言葉を聞くやいなや、セツは声をあげて泣きくずれました。わが子の名をくり返し呼び続けるセツのさけびにも似た声だけが、静まりかえった部屋中に響き渡りました。そのセツの姿を、喜吉はじっと見つめていました。

そのころの船迫の人たちは、少しでも早く診察を受けたいと思っただけでも、治療費も薬代もはらう余裕はありませんでした。だれよりも喜吉はそのことを知っていました。そのほかにも、船迫の人々が診察に来られない理由がありました。診療所までの奥州街道は、昼間でもうす暗く、夜になると追いはぎが出る危険な道でした。今でこそ車で十数分の距離ですが、当時の人々にとっては決して楽な道ではありませんでした。船迫には診療所はありません。このまま村中に病気が広がれば、命を落とす人が増える心配がありました。

「船迫の人たちを救えるのは、喜吉先生しかない。わたしもできるかぎり協力する。どうか頼む。」

現状を見かねた地元に住む大沼半左衛門と高橋兵十郎が、協力を申し出ました。考えぬいた末に、喜吉は船迫にも診療所を作り、日曜日に診察することにしました。さらに、治療費はすべて無料にし、薬代も喜吉が負担することにしました。こうして、「日曜診療所」が誕生しました。

喜吉はますます忙しくなりました。奥州街道を人力車でかけぬけながら、診察に通い続けました。日曜日が来るたびに、診療所は、喜吉の到着を待ちわびる人であふれかえりました。

「喜吉先生、喜吉先生。吐き気が止まらない。腹も痛くて夜も眠れない。一番にみてもらいたくて、ずっと先生を待っていました。」



追いはぎ：
通行人をおそって、
衣服や持ち物をう
ばいとる盗賊。

人力車：
人に乗せ、車夫が
引いて走る二輪車
(現在のタクシーの
ような役割の乗り
物)。



さっそく男を診察してみると、あばら骨が見えるほどやせ細ってしまいました。目もうつろで息も絶え絶えでした。かなり重い病気に違いない。このままほうっておいては命が危ない。喜吉はさっそく薬を用意して持たせ、おかげも差し出しました。

「本当にいいんですか。」

「安心なさい。あなたの喜ぶ顔を見ると、わたしも元気が出るのです。」

腰の曲がったその男は、何度も何度も頭を下げながら帰っていききました。

「先生、この子は昨日から体じゅうをかきむしって、とうとう血がにじんできました。何かとんでもない病気かと思うと心配で、心配で。」

「心配ご無用。体をきれいにふいて、この薬草をつけなさい。すぐに治るから安心なさい。」

喜吉は小さな女の子の手に薬をそっと置き、力強くにぎりしめながら言いました。女の子はにっこりとほほえみ、うなずきました。気がつくつと、もう日が沈みかけていました。喜吉はかさつく両手を洗いながら、ふうっと大きく息を吐き出しました。

喜吉が診察した病気は、リュウマチなどさまざまな種類にわたっていました。喜吉は昼も夜も夢中で働き、たくさんの方の命を救いました。

「喜吉先生は命の恩人だ。」

「先生、わたしにはお金はありませんが、家でとれた大根ならあります。どうかこれを受け取ってください。」

リュウマチ：
筋肉や関節などに
痛みを発する病気。
リュウマチともい
う。

いつしか日曜診療所には、喜吉をしたう人々が集まるようになりました。わけへだてなく人々の命を救うために全力を傾けた喜吉の姿は、地域の誇りとなりました。明治二十六（一八九三）年から、十一年間にわたって日曜診療所は開設され、診察した患者の数は二千七百人にのぼりました。

喜吉がこの世を去ったとき、人々はとても悲しみました。そして、喜吉の髪の毛をまつろうという声があがり、髪塚として今も船迫に残されています。「一人の命も無駄にしない」という思いを生涯つらぬき通した喜吉の思いや志は、時代を越えて今も語りつがれています。



櫻井喜吉の髪塚（柴田町）

櫻井喜吉

櫻井喜吉は、文久二（一八六二）年、槻木村（現在の柴田町槻木）に生まれ、医者として診療所を開いた。また、喜吉は、医者のいない同じ柴田町の船迫地区で、自分の診療所が休みである日曜日を診察日にあて、そこで無料で診療を行った。そして、貧しい人や病気で苦しむ人々を救った。

髪塚…
亡くなった人の髪の毛の一部をうずめて石碑を建ててまつったもの。

高山 善右衛門 —ふるさとに豊かな大地を—

(外交官になるための勉強を続ける道と、角田に帰って家業をつぐ道、どちらを進めばいいのか)

ふるさとをはなれ、東京の大学で学んでいた善右衛門の心には、迷いがありました。角田に帰って家の仕事をついでほしいという父からの手紙が何度も届いていたのです。地主であり町の世話役をし、人々のために働く父の姿を見て育った善右衛門は、その仕事の尊さも、よくわかっていました。しかし、大学で学び続けたいという気持ちも強くなりました。そして、ついに角田に帰ることを決心したのでした。善右衛門が二十二歳のときでした。

角田に帰った善右衛門が見たものは、生活に苦しむ町の人々の姿でした。中でも、人々を悩ませていたのは、水の問題でした。そのころの角田は水に恵まれず、井戸をほってもよい水はなかなか出ませんでした。町場の多くの家では、水売りから飲み水を買って生活していました。農家の人々は、「ため池」から水を引いて農業用水にしていたので、日照りが続くと水不足のために、稲はかれました。田に流す水をめぐって、人々の間には水争いも起こりました。

明治二十三(一八九〇)年、町議会議員となった善右衛門は、どうにかして町の人たちが苦しんでいる水不足の問題を解決したいと思うようになりました。そして、阿武隈川から水を引く計画について真剣に考えました。阿武隈川は、角田の町を流れる大きな川で、一年中、豊かな水をたたえています。ところが、町より低いところを流れているため、川から田畑に水を引くことはできませんでした。そこで用水を作り、土地の高低差を利用して水を流すことを考えました。となりの丸森町の上流から、全長六キロメートルにわたって用水を作る計画は、父の代にも議会で話し合われていました。しかし、

ため池：
田畑の水や防火用水などをためておくための池。

用水：
飲み水や田畑に引く水、洗濯、防火など生活に使う引き水。

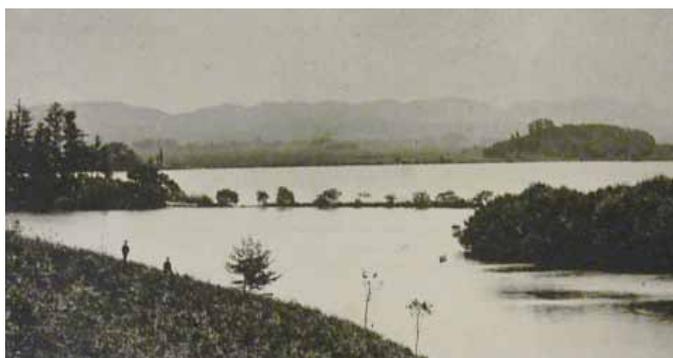
当時の技術では工事が難しく、ばく大なお金がかかるということで実行されなかったのです。善右衛門はくる日もくる日も考え続けました。

善右衛門は、その計画に再び目を向けました。今の技術なら工事が実現できるのではないかと考え、用水について手をつくして調べました。専門家にも相談し、費用の面でも技術的にも工事が可能かどうかと確信をもつようになりました。

（用水を作れば、人々の暮らしはきっとよくなるだろう。工事には多くの費用が必要だが、米がたくさんとれるようになれば、十分返せるはずだ。用水を作ることは、町の発展につながる。わたしは、この用水を完成させるために、自分のすべての力を注ごう）

そう決心した善右衛門は、多くの人に声をかけ、用水工事への理解を求めました。町議会でも、用水の必要性について熱心にうたったえました。ところが、工事への反対は大きいものでした。町の人々は、長い間使ってきた大切なため池をなくすことへの反発や失敗したら借金が残るのではないかという不安などを善右衛門にぶつけてきました。

「ご心配はよく分かります。しかし、いろいろな調査を重ねた結果、私は工事の成功に確信をもっています。みなさん、町に用水ができたことを考えてみてください。水くみの苦労はなくなります。田畑には、いつでも水が引かれ稲が青々と育つでしょう。使わなくなるため池は、新しい田にすることができず。田が広がって米がたくさんとれるようになれば、暮らしが楽になります。わたしの夢は、角田を豊かな町にすることです。用水は、そのための大きな一歩となることでしょう。」そんなときでも、善右衛門は自信をもっておだやかに語り続けました。



干拓前のため池の大沼（手前が赤沼）（角田市）

また、善右衛門は、工事の方法や資金について、人々にわかりやすく説明しました。どんな質問にも耳を傾けていねいに答えました。話を聞いた人々は、やがて一人また一人と心を動かされていきました。明治三十七（一九〇四）年には、四十三名の会員が集まって『上水期成同盟会』を作りしました。

ある日、町長が善右衛門に工事が成功しなかったらどうするつもりかと聞きました。善右衛門はしばらく考えてから、その場合は自分が財産を全部出しておわびをし、町の人たちに負担をかけるようなことはしないと答えました。それを聞いた町長はさっそく議会を開き、ついに工事の計画は議会で認められ、動き出しました。

しかし、明治三十九（一九〇六）年も大凶作に苦しんだ前年に続き天候不順のため、町には食べる物のない人があふれ、重苦しい空気が町全体をおおっていました。善右衛門は、食べ物がない人たちのために、自分の家の米でおかゆをたいて配りました。また、種もみがない人には、山形から取りよせて配りました。

こうした中で、町が大変なときに用水工事どころではないと、計画に反対する者も出てきました。その人々に向かって、善右衛門は言いました。

「今は、食べるものを買うお金がない人に、仕事をあたえることが必要です。工事には、たくさんの人手が必要になります。町の人々が工事現場で働いて賃金をもらえば、生活がきつと楽になるでしょう。今こそ、用水工事を始めるべきではないでしょうか。」

善右衛門のうったえは議会でも認められ、明治三十九（一九〇六）年四月四日、ついに角田用水の工事が始まりました。

工事現場では、五百人以上の人が働きました。手作業で土をほって運ぶ工事は大変なものでした。岩が固くて一日にほんのわずかしか進められないこともありました。途中、作業の困難さから工事期間がのびて資金が足りなくなったり、善右衛門は、自分の財産を差し出すことを申し出ました。その熱意が議会にも伝わり、予算の追加が決定しました。そして、一年におよぶ工事もついに完成の日を迎えたのです。

凶作：

作物のできがとも悪いこと。

天候不順：

天候が安定しないこと。

明治四十(一九〇七)年三月二十九日、初めて丸森から角田への用水に水が流されました。たまっていた泥を押し流しながら、勢いよく水が流れました。

「水だ。水が来たぞ。」

待ち構えていた人々は、清らかな水が目前の堀をいっぱいにして流れていく様子を見て歓声をあげました。肩をたたき合う人、喜びをおさえきれず、水を追って走り出す人もいました。

この日は、午後六時から上水委員や役場職員など十数名が楽隊とともに角田用水の通水を町内にふれまわりました。楽隊に続いて歩いた善右衛門は、用水の流れと町の人々の笑顔を交互に見つめながら、何度もうなずきました。

この後、大沼や赤沼などのため池が干拓され、善右衛門が話していたように豊かな水田に変わりました。角田町は、善右衛門に「上水」の二文字をおくりました。今でも人々は尊敬をこめて善右衛門を「上水翁」と呼んでいます。



上水翁の銅像

高山 善右衛門

高山 善右衛門は、文久三(一八六三)年に角田(現在の角田市)の裕福な家に生まれた。当時の角田は、農業用水としての水不足が深刻な状況であった。そこで、善右衛門は自分のお金を出してでも用水を作りたいという強い意志で工事に取り組み、全長約六キロメートルの角田用水を完成させた。以来、地元角田市の人々は、善右衛門を「上水翁」と呼び、現在でも尊敬している。

高山 開治郎 — 桜並木を後世に —

「なんて美しい桜なんだろう。」

蔵王の山々をはるかに望み、白石川沿いに咲きほこる桜の前で多くの人々が感嘆の声をあげ、カメラのシャッターを切る音があちらこちらから聞こえてきます。

仙台から南へ約三十キロメートル。大河原町の中心部を白石川がとうとうと流れます。兩岸の堤防には約八キロメートルにわたって桜並木が続きます。毎年、桜の季節になると県の内外からおおぜいの観光客が訪れ、「一目千本桜」の名で東北地方でも有数の桜の名所となっています。

この桜並木は、ある一人の人物の壮大な夢の結晶なのです。その名は高山開治郎。かれは、明治九（一八七六）年四月、江戸時代から続く由緒ある旅館の長男として大河原の地に生まれました。しかし、開治郎が十五歳のとき、父親が亡くなりました。そして、家業の旅館も廃業しなければならなくなりました。まだ若かった開治郎にはどうすることもできませんでした。

明治二十四（一八九二）年、開治郎は十五歳でふるさとをはなれて東京に働きに出ました。これまで何不自由なく暮らしていた開治郎にとって、身よりもなく朝から晩まで住みこみで下働きをする日々はとてつらく厳しいものでした。いく度となくふるさとの宮城に帰ることを夢見ました。幼なじみの笑顔や生まれ育った大河原の町並み、残雪をいただいた雄大な蔵王連峰、清らかな流れの白石川。いつも思いうかぶのはなつかしいふるさとの景色でした。



白石川の桜並木（大河原町）

(みんなはどうしているだろうか)

しかし、当時、大河原に帰るのは蒸気機関車じょうききかんしゃを乗りついでも二日がかりの長旅です。そんな休みなどを取れるわけがありません。そして何よりも高い切符代きっぷだいをはらうゆとりなど開治郎にはあるはずありませんでした。

(いつか必ず胸むねをはってふるさとに帰るぞ。それまでのしんぼうだ)

開治郎は、来る日も来る日も働き、商売しょうばいの仕方を身につけました。店の仕事が終わると寝る間もおしんで勉強にはげみました。そして苦難くなんの末に会社をおこして成功を収めたのでした。

そのころ、東北地方はたびたび冷害や水害におそわれていました。農民は米の不作なやに悩み、仙台や福島では米の値上ねがりに反対して「米騒動まいそうどう」といわれる暴動ぼうどうも起きていました。新聞や手紙で伝え聞くそれらの知らせに、開治郎はもどかしく感じるのです。

(東京ではこんな豊かな暮らしゆたかをしているのに……。何か自分にできることはないだろうか)



高山開治郎

開治郎は日々の忙いそがしさに追われながらも、ふるさとの人々の暮らしがとても気がかりでした。大河原をはなれること三十数年。東京で開治郎は新聞社を始めたり画商えしやうをしたりと手広く事業を進め、立派りっぱな実業家として広く知られるようになりました。しかし、いつも心は宮城に、大河原にありました。開治郎はひとりふるさとの方角の空をじっと見つめるのです。そんなとき、以前から進められていた白石川の改修かいしゆ工事が完成するとの知らせが届とどきました。

米騒動…
米の値段が高くなり、生活に苦しむ人々が米を安くするよう要求して米屋などをおそった事件。

実業家…
会社などをつくり経営をする人。



植樹された桜の若木 (大河原町)

これまで白石川はたびたび氾濫し、そのたびに田畑は流され、家々も大きな被害を受けていました。六年間にもわたる大工事の末、川幅は広げられ堤防が築かれ、水害の心配はなくなったのでした。「今こそ恩返しをするときだ。しかし、食べ物やお金を寄付したのではすぐになくなってしまふ。何かもって心に残るものを、みんながずっと喜んでくれるものをおくりたい。」

開治郎が住んでいた東京の屋敷の近くには、とても見事な桜並木があり、地域の人々のいこいの場所になっていました。花見の季節には多くの人々が行きかい、笑顔で満ちあふれていました。夏は強い日差しをさえぎり、木かげで楽しむこともできました。人々の暮らしの中にはいつも桜並木がありました。

「これだ。今わたしにできることは。」

目の前がぱっと明るくなったような気がしました。

大正十二(一九二三)年、四十七歳の開治郎は白石川沿いの桜並木を夢見て、七百本の桜の苗木をおくることにしました。開治郎は東京から二人の植木職人を連れ、地元の職人たちといっしょに現在の大河原町から柴田町の船岡にかけて白石川沿いに植樹しました。そして、桜の苗木が根づいたのを確かめて、昭和二(一九二七)年にも、さらに五百本の苗木を植樹しました。そのときには、柴田農林学校(現在の柴田農林高等学校)の生徒もいっしょに奉仕作業を行いました。

開治郎は、一生懸命若木を植樹する生徒たちを見つめました。

植樹：
木を植えること。

こうして、ふるさとを思う一心で、合計千二百本もの桜の苗木を植えたのです。当時のお金で四千円あまりのお金を、町のために差し出したのでした。昭和八（一九三三）年、町は、その栄誉をたたえて、白石川のほとりに「桜樹碑」を建てました。昭和十七（一九四二）年、開治郎は六十六歳でこの世を去りました。その後、日本は大きな戦争に敗れ、世の中は混乱し、人々は貧しさに苦しんでいました。しかし、人々はふるさとの復興のために努力し立ち直り、見事に発展をとげました。その間も桜は毎年咲き続け、人々に希望と笑顔をあたえてくれたのです。

桜（ソメイヨシノ）の寿命は約六十年から七十年といわれています。しかし、約九十年たった今も、開治郎の志を受けついで地域の人々の手によって桜の世話や新たな植樹が続けられ、毎年きれいな桜を咲かせています。宮城県を代表する桜の名所として東北の「桜切手」にも描かれるまでになりました。今も人々の心に、開治郎の思いが咲き続けています。

高山 開治郎

高山 開治郎は、明治九（一八七六）年、現在の大河原町に生まれた。十五歳でふるさとをはなれた開治郎は、東京で実業家として成功を収めた。開治郎は、ふるさと大河原町の白石川沿いに、多くの桜の苗木を植樹した。この桜は、「一目千本桜」として愛され、現在も大切にされている。



桜樹碑

当時のお金の
四千円…
当時（大正十年）
の大卒初任給が
五十円、今の約
二千万円ほど。
栄誉…
めいよ。すぐれた
ものとして認めら
れほめたたえられ
ること。



くった風景（白石川と桜並木：大河原町）



いにしえより人々を見守る蔵王 先人がつ

河村

瑞賢

—東廻り航路を拓く—

「これで、きっと江戸へ米を送ることがができる。」

河村瑞賢は、荒泷（現在の巨理町荒泷）の港に立ち、船を見送りながらつぶやきました。

瑞賢は、元和四（一六一八）年、東宮村（現在の三重県南伊勢町）に生まれました。

十三歳のとき、江戸に出た瑞賢は、工事に使う石や木材を運ぶ車ひきの仕事につきました。仕事のかたわら、沼地を埋め立てたり堀を作ったり石垣を組んだりして町や屋敷ができていく工事の様子を、いつも興味深く見ていました。

二十歳を過ぎたころ、工事をしていた役人から、人足が集まらず工事が遅れがちで困っているの、人足頭をやってみないかと頼まれました。瑞賢は、それまでさまざまな仕事のやり方を見ていて、人足をやる気させる方法や仕事の段取りが大切であることに気づいていました。そこで、それを実際に生かしてみることになりました。すると、予定より短期間で工事を終えることができました。その後も、仕事を頼まれると確実にやりとげるので、周囲から認められるようになりました。

瑞賢は、これから何が必要になるかをいつも考えていました。明暦三（一六五七）年の江戸の大火のときには、すぐに材木が足りなくなる

人足：
力仕事などをする人。
頭は、その中で責任ある人。



と考え、いち早く木曾（現在の長野県木曾地方）まで買いに行きました。そして、材木商として成功したのです。材木商となってからも、難しい土木工事があると仕事を頼まれました。努力や工夫を重ねて見事に成功させる瑞賢の腕が評判になっていたのです。

やがて、瑞賢は、幕府から大きな仕事を任されることになりました。それは、数万石の奥州の御城米を江戸に運ぶことでした。

「今の海運では、船が難破することが多い。しかも、江戸まで御城米を運ぶのに一年もかかることもある。これでは米が使い物にならない。何とか速く安全に米を運ぶ方法を考えてくれないか。」

と頼まれました。

瑞賢は、原因をつき止めれば、安全に運ぶことが可能になると考えました。そこで、これまでの海運の方法をくわしく調べることにしました。すぐに使用人に、荒浜から房総半島を回って江戸に向かう沿岸の港や道を調べて絵図面にするのを命じました。また、船乗りの話をできるだけくわしく聞くように念を押しました。

調べてみると、これまでは幕府の役人は船問屋を決めたら、その後の仕事は船問屋に任せきりだということが分かりました。

瑞賢は、それまでのやり方を変えるために、幕府が直接船を雇って海運を行うことに改めることにしました。そして、船の操作は風力に頼るものであるため、風や海の流れをよく知る熟練した船頭を選んで乗せることにしました。また、転覆や浸水を防ぐために船の側面に目印をつけ、それをこえて船が沈むほど荷物を積みすぎないようにしました。

奥州：

今の東北地方の福島、宮城、岩手、青森の四県と秋田の一部。

石：

主に穀物を量るのに用いる体積の単位。

一石は（約一五〇キログラム）約一八〇リットル。

御城米：

全国の幕府の領地から江戸などに運ばれる年貢米。

難破：

暴風雨などにあつて船がこわれたり浸水して航行できなくなったり沈没したりすること。

船問屋：

各地の港にあって、港に着いた船の荷物の積みおろしをしたり船員の世話したりする店。



東廻り航路

難しいのは、航路をどうするかでした。瑞賢は船頭たちの話を聞きたびに考えました。そして、房総半島に近づいたとき、砂浜の海岸や海中に岩場がたくさんある所で難破することが多いということがわかりました。

ある船頭から、

「房総半島で大風にあい、岩場に流されそうになって必死に帆を使ったのです。すると大島（現在の東京都大島町）が見えてき

て、やっこの思いでたどり着いて、助かりました。その後、南西の風に乗ったら、苦もなく江戸に着いてしまいました。」

という話を聞きました。瑞賢はこれだと直感しました。

こうして、房総半島から江戸湾に直接入らず、伊豆大島や神奈川県の三崎、静岡県の下田に行ってから、南西風を待つて引き返し、江戸湾に入るように航路を決めたのでした。また、瑞賢は、安全で確実な航行を行うために途中の寄港地を定めて浦役人を置き、水先案内人を配置して、船や荷物を管理しました。また、天候や風向き、潮の流れの情報を陸と船の間で伝え合うことにしました。

航路が決まると瑞賢は、江戸廻米の起点となる阿武隈川河口の亘理町の荒浜港へ向

浦役人：

御城米を江戸におくるために米の保管をしたり、港の管理をする役人。

廻米：

江戸時代、多量の米を一地点（おもに生産地）から他の地点（大坂、江戸などの大市場）に輸送すること。



武者惣右衛門屋敷近くの瑞賢堀（昭和初期）（千葉宗久氏蔵）

かいました。廻米に以前からかわっていた浦役人の武者惣右衛門の屋敷を宿にして、阿武隈川の上流の信夫郡や伊達郡（現在の福島市周辺）までの川の流れを調べました。阿武隈川の急流をゆるやかにするために岩を取りのぞいたり船が通る水道をほったりしました。そうして、御城米を安全に運ぶことができるようにするとともに、阿武隈川の河口の整備も行いました。さらに、荒浜には御城米を保管しておく米蔵を建て、米蔵から船で米倉庫まで運ぶ堀（瑞賢堀）を作りました。

準備は整い、寛文十一（一六七二）年に荒浜から廻米船が出航しました。荒浜港を起点としたその船は、信夫郡や伊達郡などの奥州の米を阿武隈川と東廻り航路を使って大量に江戸に送ることに初めて成功しました。

その後、東廻り航路は仙台藩の米を大量に江戸に運び、大きな利益を生み出しました。また、石巻や塩竈などの港もこの航路の拠点として発展し、太平洋側の沿岸地域の物資の輸送と人や文化の交流に大きな影響をあたえることになりました。

河村 瑞賢

河村 瑞賢は、元和四（一六一八）年に東宮村（現在の三重県南伊勢町）の農家に生まれました。その後、江戸（現在の東京）で材木屋を営んだ。瑞賢は、江戸幕府の依頼を受けて阿武隈川の水運を切り開き、物資を江戸まで輸送する東廻り航路を切り拓いた。この航路は、物資の輸送に要する時間と費用を大幅に減らした。

芦 東山 — 自己の生き方をつらぬく —

芦東山は、江戸時代に生き、『無刑録』という刑法の本を完成させた人です。

東山は、元禄九（二六九六）年、岩手県の渋民村（現在の一関市）で生まれました。

東山の家は、父も祖父も肝入りという村長のような役目をしていました。小さいころから学問にはげみ、農民の出身でありながら、十九歳で番外侍として仙台藩の武士に取り立てられるとともに、二十六歳で儒学者として仕えるようになりました。

東山は、学問にすぐれているだけでなく、儒教の教えに基づいて藩にとつ

てためになることを考え、意見を述べる人でした。当時は、自分よりも身分が上の人に対して意見を言うことは難しいことでした。そのため、身分が上の人と異なる考えを述べる人はほとんどいなかったのです。しかし、東山だけはちがいました。それこそが儒官としての自分の役目だと考えていたのです。

東山は二十七歳のとき、藩主の伊達吉村公にあてて意見書を出しています。それには、儒学の勉強をしっかりとすることや学問にすぐれた先生を採用すること、殿様への意見は聞き入れるべきこと、藩の学校を建ててすぐれた人を育てることなど、藩主としてやるべきことが書かれていました。

一方、東山は儒学者としての学問を続けながら、医学や薬草の勉強、冷害を乗り切る方法などを学んでいました。それは肝入りの家に生まれ、小さいころから農民の苦労を見て育ってきたからでした。さらに、祖父の白栄は、孫の東山には農民の苦しい生活を少しでもよくし、ふるさとのために役立つ人になってほしいと願っていました。東山は儒学者として活躍するようになってからも祖父の願いを決して忘れることはありませんでした。



芦 東山（芦東山記念館蔵）

儒学者：
孔子の思想をもとにした中国古代からの伝統的な学問の研究を仕事にしている人。

儒官：
儒学を教える仕事の役人。

四十三歳のときに、順調に歩んできた東山の人生に苦難のときが訪れます。

仙台藩が学問所を建てることになったときに、東山は自分が考えていた案を出しました。これまでは、父親の身分の順に子どものすわる順番が決められていました。このことについて、目上の人を尊重する考えの東山は、「学生の席順は、親の身分ではなく、年齢の順にすべきである。」

という意見を出したのです。しかし、東山の出した案は通ることはありませんでした。それからしばらくして、東山のもとに評定所から呼び出しがきました。

「東山に、石母田家預けを言いわたす。」

石母田家預けとは、「他人預け」という刑罰で、仙台藩の役人石母田氏に東山の身柄を預け、屋敷に閉じこめ自由な行動ができないようにすることでした。東山が自分の考えを変えようとせず、意見をおし通そうとしていることがその理由でした。何らかのことがめがあるかもしれないとは思っていたものの、予想以上に厳しい刑でした。しかし、東山は、

「はい、わかりました。」

と静かに返事をする、宮崎（現在の加美町宮崎）に旅立つ準備にとりかかりました。妻も、少しもあわてることなく、小さい二人の子どもと手伝いの者を連れ、宮崎へと向かったのです。

宮崎での東山の住まいは、何人もの役人によって一日中監視されていました。そのうえ、筆や硯を使うことさえ禁止されました。ようやく、筆を使う許しができると、東山の部屋には一晩中明かりがともることが多くなりました。

やがて、宮崎に厳しい冬が訪れます。静まり返った村には、ヒューヒューと風の音だけが鳴りひびきます。薬菜山からふき下ろす冷たい雪混じりの風は、家の中にすき間風となって入りこみ、するどくはだをつきさすようでした。あまりの寒さに筆を持つ手もかじかみました。しかたなく東山は、部屋に和紙をはりめ

評定所：

仙台藩の最高司法機関。

石母田家：

伊達家の家臣

宮崎（加美町宮崎）をおさめていた。

とがめ：

罰とされること。

薬菜山：

加美富士ともいわれている。

冬の薬菜おろしは、地吹雪をおこすほどの強い風が吹く。

ぐらせて、寒さをしのぎました。そして、

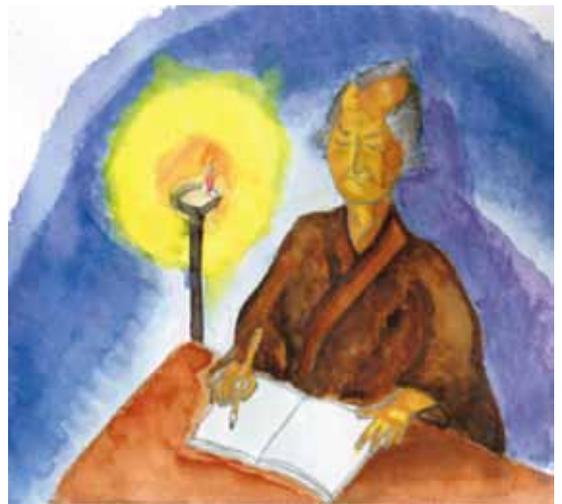
「そうだ、今だからこそできる。今だからこそ。」

とつぶやくと、一心不乱に刑法の本を書き進めました。

東山は、宮崎に来てからわずか半年後には、『無刑録』という刑法の本の作成に取りかかっていたのです。今は石母田家預けの身、何かと不自由ではあるが、幸い時間だけは自由に使うことができると、何度も自分に言い聞かせていたのです。仙台藩の儒官として仕えていたころは、藩の仕事で忙しく、刑法の本の作成に取りかかることができずにいたのです。刑法の本を書くことは、東山が師として最も尊敬していた江戸の学者である室鳩巢からすすめられていたことでもありました。東山はこのような立場におかれても、儒学者として果たすべき自分の役目を忘れなかったのです。

その後、東山は十七年かかって、ようやく『無刑録』十八巻を完成させました。東山はその中で、すべての人間に刑罰がなくても犯罪が発生しないような理想の社会を求め「罪人をよりよい道に導く刑にすべきである」ことをうたったえています。東山は、すべての人間にはもともと善の心があり、罪を犯してしまった人に対しても厳しい罰を課すのではなく、教え導くことによって善の心をもって行動する人間にすることができると考えていました。

東山が『無刑録』を完成させるためには、仙台藩の龍宝寺（仙台市）が持っている書物で確かめる必要がありました。東山は、何度も願い書を出し、やっとのことでお寺の大切な書物を貸し出してもらったことができました。そして、ついに東山は『無刑録』を完成させたのでした。



刑法…
犯罪と罰について
きめた法律。

善…
よこしい。

東山が「他人預け」を許されたのは、宮崎で十九年間、高清水（現在の栗原市高清水）で四年間の計二十三年間にわたる幽閉生活の後でありました。そのとき東山は六十六歳。許しを得て浪人となった東山は、ふるさとの浜民村に帰りました。それからというもの、東山の家の前は訪れる人で毎日いっぱいになりました。東山は、学問を教えてほしいという人には、たとえ貧しい人であっても、わけへだてなく教えました。また、病人に対しては薬草を調査してあたえるなど、忙しく毎日を送っていました。

東山は、ここでも自己の生き方をつらぬき通し、八十一歳の生涯を静かに終えたのでした。



『無形録』（芦東山記念館蔵）

明治時代になると、政府はフランスの刑法を手本にして日本の刑法を作ろうとしました。そのとき、日本にすでに刑法についてすばらしい考えをもっていた人物がいたことがわかったのです。それが東山でした。政府は『無形録』の価値を認め、元老院という国の機関から出版しました。

東山が亡くなってから百一年目のことでした。

芦東山

芦東山は、元禄九（一六九六）年に、浜民村（現在の岩手県一関市浜民）に生まれた。仙台藩の儒学者として勤め、室鳩巢のすすめを受けて、『無形録』を書き著した。『無形録』は、人間愛の精神をもって人に接し、教育によって刑罰のない平和な世の中にすることを説いたものであり、近代刑法の参考資料となった。

幽閉：
他の人と会わない
ようにとじこめる
こと。

浪人：
藩から給料をもら
えず、藩の武士で
なくなること。

慶念

—子どもの幸せを願って—

慶念は、江戸時代の末期から明治の初めにかけて、涌谷町に住み、命の尊さを唱え続けた僧です。小太りのがっちりした体格で、うれしいときは大きな鼻をひくひくさせながら満面に笑みをうかべて喜びました。ぜいたくをきらい、貧しい身なりをしていたので、「ほいと坊主」と呼ばれていました。僧侶でありながら、寺に住まず各地を転々としていました。食べ物も粗末なものを好んで食べ、飢えをしのげればよいと考えていました。着物をあたえようとする人があっても、

「もったいない、もったいない。」

とお礼を言うだけで受け取りませんでした。

いつも時間があれば説法をするために歩き回っていました。

田んぼで草取りをしている人がいれば、

「わたしの手伝った分だけ休んで、わたしの話を聞いてくれ。」

と言って、草取りを手伝い、農夫たちを前にして説法をしました。

慶念は、小さな命を大事に考えていました。畑を作るために、山地の草を焼くときは、

「ごめんなされ。ごめんなされ。」

と、額を地面にすりつけて、焼かれる虫にしきりにあやまったといわれています。

慶念は、子どもが好きでした。あるとき、子どもたちが出来川で魚とりをして遊んでいました。慶念は、子どもたちが道ばたに投げ捨てた小さな魚の前にかがみこみ、一匹一匹拾って川に返してやりました。しかし、子どもたちをしかることはありませんでした。



説法：
仏教の教えを聞か
せること。

慶念は、山口村（現在の岩手県北上市）の羽黒山一帯の山を管理する裕福な家の次男として生まれ、名前を長兵衛といたしました。成長した長兵衛は、兄とともに木材を売るなど仕事にはげんでいました。

江戸時代の末期は、天候不順や洪水などの大災害が何度も起きました。冷夏と害虫の発生により、田畑は大きな被害を受けました。そのため、農作物の収かくが激減し、飢えに苦しむ人や病気にかかる人が増えました。食べるものがなく、命を落とす人も少なくありませんでした。天明（二七八二年）の大飢饉のころは、赤ん坊が生まれても育てることができず、泣く泣く手放す者もあらわれました。赤ん坊の亡きながら、川に投げ捨てられるというひどい話もあったようです。苦しみに耐えかねて、打ちこわしや一揆を起す民衆も増えました。心を痛めた長兵衛は、念仏を唱える集会に参加するようになりました。しかし、心は満たされませんでした。長兵衛は、自分ができることは何かと毎日悩むようになりました。そして、とうとう決心しました。

「家を出て僧になろう。仏の道を説くことで皆を救いたい。尊い命を救いたい。」

周囲は反対しましたが、長兵衛は仙台に出て僧となり、名前を「慶念」と改めました。その後、西国（西日本）へ向かい数年間修行を重ね、涌谷の地にたどりつきました。

慶念は、毎日毎日、朝から晩までひたすら村々を巡り歩き、人々に命の大切さを説きました。赤ん坊を手放そうとする家があることを知ると、思いとどまらせようと、自ら訪ねていきました。

「人が人であるための正しい道がどうしてわからぬか。」と声をからし、顔を真っ赤にして教え歩きました。

しかし、そんな慶念の努力を踏みにじるように、ひそかに赤ん坊を手放してしまう家もありました。

赤ん坊が生まれたと聞いてその家を訪ねてみると、すでに赤ん坊はいませんでした。帰り道、慶念は体中から力がぬけ、道ばたにひざまずいてしまいました。胸がしめつけられるように痛みました。心の底からわき上がる悲しくやるせない感情を押さえることができず、目の前の小川に張った分厚い氷を割ろうと拳を振り上げました。

天明の大飢饉：
江戸三天飢饉のひとつ。日本各地で餓死者を多数出した。

打ちこわし：
ふつうの人たちが金持ちや役所などをあそぶこと。

一揆：
農民が支配者を武器をもってあそぶこと。

が、すんでのところで思いとどまりました。氷の下で何か動いたのです。よく見ると、一寸ほどの小魚でした。慶念は、四つんばいになり、懸命に生きる小魚たちをしばらく見つめていました。

やがて、慶念は足下の根雪を両手ですくい、ごしごしと顔をこすりました。慶念がすくった雪の下から、細い草の芽がのぞいていました。慶念は、小魚たちに微笑み、細い草の根にそっと触れ、天を仰ぎ大きく深呼吸をしました。

隣村に、善助とおとよという夫婦がいました。大変貧しく、二人で生きていくのがやっとでした。その夫婦に赤ん坊が生まれると聞いた慶念は、心配になって善助とおとよのもとに走りました。

慶念は荒い息を整えながら、畑に出ている善助に声をかけました。

「善助さん、もうすぐ生まれるなあ。」

善助は、ゆっくりと振り向きましたが、慶念だとわかると激しくうろたえて視線をそらしました。

慶念は、静かに言いました。

「善助さん、おとよさんと相談してほしい。赤ん坊を育てられないのなら、わたしがもらって育てたい。」

赤ん坊が生まれたのは、翌朝でした。

善助は、布切れに大事そうに赤ん坊をくるんで、

「男の子です。どうか、どうかお願いします。」

と言って慶念に手渡しました。そのとき、家の中からおとよの泣きさげぶ声が聞こえました。善助も、肩をふるわせていました。

慶念は、肩をふるわせる善助と小さな赤ん坊を抱きしめました。

「この子は、わたしが大切に育てます。ありがとう、ありがとう。」

と言いました。そして、大きな鼻をひくひくさせながら、赤ん坊にっこりと語りかけました。

「名前をつけなければいけません。わたしの新しい道の始まりだ。そうだ、『はじめ』がいい。どうだ、『はじめ』。よい名

がついたぞ。うんうん。」

慶念は、赤ん坊の小さな桃色のほっぺに自分のほっぺをくっつけました。そして、しばらく赤ん坊のほほの温かさを感じていました。

赤ん坊を背中におんぶして、お乳をもらえる農婦を訪ね歩く毎日が続きました。また、命を落とす赤ん坊がないかと、山野を歩き回りました。さらに、説法を唱え歩くことも忘れませんでした。寺でお経を唱える坊主ではなく、自ら野を巡り、赤ん坊を育てながら雨の日も風の日も説法を続ける姿は、やがて多くの人々に「生きる」希望をあたえるようになりました。慶念のもとには、一人また一人

と赤ん坊が預けられました。慶念の信者によって阿弥陀堂が建てられましたが、この阿弥陀堂には、常に、二、三人の赤ん坊と四、五人の幼子がいたそうです。男手一つで赤ん坊を育てることはたやすいことではありません。しかし、慶念に迷いはありませんでした。寝る間もおしんで赤ん坊に飲ませるお乳をもらい歩き、幼子の食べ物や着物をそろえるためにあちこち走り回りました。赤ん坊がない家で、ほしいという家があれば、慶念のもとで育てた赤ん坊を預けました。一度は手放した家でも、やはり引き取りたいと願いがあれば、喜んで赤ん坊をもどしました。ひとえに、子どもがすこやかに生き続けることだけを願っていたのです。

慶念は、五十二歳の生涯を閉じるまでの間に、五十三人もの赤ん坊の命を、救い育てたといわれています。

慶念

慶念は、文政三（一八二〇）年に山口村（現在の岩手県北上市）に生まれた。天災や飢饉により暮らしが苦しく、赤ん坊を手放そうとする人々から、赤ん坊をもらい受け、五十三人もの赤ん坊の命を救い育てた。慶念は、この世に生きるものすべての命の尊さを身をもって示し続けた。



阿弥陀堂…
仏様をまつた
建物。

鎌田 三之助 — 沼地を豊かな土地に —

鎌田三之助は、文久三（一八六三）年、木間塚村（現在の大崎市鹿島台）に、大地主だった鎌田家の次男として生まれました。

そのころの村では、雨が降り続けると品井沼の水があふれて洪水となり、稲穂が水浸しになって収穫できなくなることがしばしばありました。そのため、「三年に一度しか米が取れない」といわれるほど、貧しい村になっていました。

三之助の祖父玄光と父三治は、水害に苦しむ村の人々を救うために、品井沼の排水路の改修を進めていました。そんな祖父や父の姿を見て

育った三之助は、いつも品井沼の工事のことを考えていました。三之助が十四歳のとき、亡くなる間際の祖父から、「自分の食べるものや着る服の心配をするより、まず、品井沼の心配をしなさい。」と言われました。その言葉を聞いた三之助は、父といっしょに祖父の思いを引きつぐことを決意しました。

十五歳になった三之助は、軍人をめざして勉強をするために東京へ行きました。しかし、病気のために軍人になることをあきらめ、政治家になることにしました。品井沼の干拓工事を進めるためには、多くの費用と人手が必要になります。そこで、政治家になれば費用や人手を集めやすくなると考えたのです。東京で五年間勉強し、村にもどった三之助は、父を助けて品井沼の干拓工事に打ちこみました。

三之助は、品井沼の干拓工事に情熱を注ぐと同時に、医療や教育にも力を入れました。そのころ、村では天然痘



鹿島台小学校に建つ三之助像

干拓：沼や湿地から水をぬき、田畑などにすること。

という病気が流行しましたが、村には医者がいませんでした。さっそく、薬を購^こ入^いして村人に配^くったり栃^と木^ぎ県^{けん}から医師^{いし}を招^{まね}いて医院^{いんえん}を開^{ひら}かせたりしました。また、村の青年^{せいねん}たちに勉強^{べんきやう}を教^おえることにも時間^{じかん}を費^つやしました。そのため、三^{さん}之^し助^{すけ}は、多くの村人^{むらびと}から信^{しん}頼^{らい}されるようになりました。その後、三^{さん}之^し助^{すけ}は志^し田^た郡^{ぐん}議^ぎ会^{かい}議^ぎ員^{いん}や宮^{みや}城^{じやう}県^{けん}議^ぎ会^{かい}議^ぎ員^{いん}になりました。明治^{めいし}三^{さん}十五^{じふご}（一九〇二）年には、三^{さん}十九^{じゅうきゅう}歳^{さい}で国^{こく}会^{かい}議^ぎ員^{いん}になりました。三^{さん}之^し助^{すけ}が東京^{とうきやう}で議^ぎ員^{いん}の仕事^{しごと}をしてい^いる間^まも、品^{しん}井^い沼^のの干^{かん}拓^{たく}工^{こう}事^じは続^つけ^られ^てい^まし^た。

四^よ十三^{じふさん}歳^{さい}にな^なつた三^{さん}之^し助^{すけ}は、村人^{むらびと}とい^いつしよにメ^めキ^きシ^しコ^こに渡^{わた}つて移^い民^{みん}事^じ業^{ぎやう}に取^とり組^ぐみ始^はめ^まし^た。その矢^や先^{せん}に、県^{けん}令^{れい}（県^{けん}知^ち事^じ）から電^{でん}報^{ぱう}が届^とき^まし^た。品^{しん}井^い沼^のの工^{こう}事^じをめぐつて、賛^{さん}成^{せい}する村人^{むらびと}と反^{はん}対^{たい}する村人^{むらびと}が対^{たい}立^{りつ}して^いるの^ので村^{むら}にもどつて来^きて、村人^{むらびと}たちを説^せ得^{とく}してほ^ほしいとい^いう内^{うち}容^{よう}で^した。

村^{むら}にもどつてみ^みると、村^{むら}は賛^{さん}成^{せい}派^{はい}と反^{はん}対^{たい}派^{はい}に二^に分^{ぶん}さ^れ、工^{こう}事^じも中^{ちゆう}断^{だん}して^いま^した。三^{さん}之^し助^{すけ}が村^{むら}をはな^なれて^いる間^まにも洪^{こう}水^{すい}などの被^ひ害^{がい}にあ^あい、村人^{むらびと}たちのま^まとまりがな^なくな^なつて^いたので^した。

「メ^めキ^きシ^しコ^こでもわ^わたし^しがもどつてくるのを待^{まち}つて^いる人^{ひと}たち^{たち}が^いる。」

決^{けつ}心^{しん}しかね^なて^いた三^{さん}之^し助^{すけ}は、

「メ^めキ^きシ^しコ^こにはあ^あなた^たの代^{だい}わり^りを^をする人^{ひと}が^いるはず^ずです。でも、この村^{むら}にはあ^あなた^たが^が必要^{ひつやう}な^なので^しす。」

と^とい^いう母^{はは}の言^{こと}葉^はに後^{あと}押^おし^しさ^れま^した。品^{しん}井^い沼^のの干^{かん}拓^{たく}は、祖^そ父^ふや父^{ちち}の願^{ねが}い^いでもあ^ある。何^{なに}よりも自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}が^がふ^ふるさ^さとを^を豊^{とよ}かな村^{むら}にする^しることを願^{ねが}つて^いたはず^ずだと、改^かめて品^{しん}井^い沼^のの干^{かん}拓^{たく}工^{こう}事^じに全^{ぜん}力^{りき}を注^つぐこ^こに^にま^まし^た。

それ^{それ}から^{から}の三^{さん}之^し助^{すけ}は、反^{はん}対^{たい}して^いる村人^{むらびと}の家^いを^を一^{いっ}軒^{けん}一^{いっ}軒^{けん}回^わり、説^せ得^{とく}し^まし^た。長^{なが}い間^ま、品^{しん}井^い沼^のの洪^{こう}水^{すい}をど^どうする^すことも^もでき^きず^ずに^にいた村人^{むらびと}たちは、す^すぐ^ぐには三^{さん}之^し助^{すけ}の^の話^わに耳^{みみ}を傾^{かたむ}け^ませ^んで^した。

「品^{しん}井^い沼^のの水^{みづ}をぬ^ぬく^くな^なん^んて、無^む理^りな^な話^わだ。」

「荒^あれ^れ狂^{くる}う自^じ然^{ぜん}の^の力^{ちから}を、人^{ひと}の手^てで防^ふご^うな^なん^んて^てば^ばか^かげ^てい^いる。」

天然痘：
ウィルスが原因で流行し、高熱を発する。熱が引くと、顔面に発疹のあとが残る。当時は、この病気がかかって亡くなる人が多かった。

移民事業：
日本人が外国に移り住んで、働くことを進める事業。

「そんな工事などできはしない。」

それでも三之助は、めげることなく、雨の日も雪の降る日も、一軒一軒訪ねて回りました。

「わたしたちは百年もの間、品井沼の洪水に苦しめられてきたのです。」

「この工事をやりとげなければ、これまでの努力がむだになるのです。」

「一時の苦しみに耐えないで、これから先も苦しみ続けることはおろかなことです。」

三之助は、言葉をつくして説得しました。どんなにののしられてもかげ口をたたかれても、決してあきらめませんでした。そんな三之助の熱意が、反対していた村人たちの気持ちを少しずつ変えていきました。一人、また一人と、三之助の説得に応じる村人が増え、ようやく工事が再開されました。三之助の心にまた灯がともりました。

工事を進めるかたわら、多くの村人の強い願いに応じて、三之助は、四十六歳で村長になりました。村長になるにあたり、村人たちに向かって、

「村は今、貧乏のどん底にある。ほかの町や村と同じようにするには、生やさしい覚悟ではいけない。明日といわず、今日からすぐに村を建て直さなければならぬ。たとえ一人の力は弱くとも、村民一体になって努力すればできることを信じてほしい。ぜいたくやむだづかいをやめ、一生懸命に働いてほしい。」

と呼びかけました。その翌日から、三之助は自分からお手本を示すために、ひげをそり、つぎはぎだらけの衣服を身につけ、わらじをはいて仕事をするようになりました。村長になってからの三十八年間、三之助は無報酬をつらぬき通しました。そんな三之助や祖父の時代からの鎌田家三代の思いが村人にも通じて、品井沼の工事は以前にも増して、熱が入るようになりました。



三之助が村長になった翌年には、品井沼の干拓工事が進み、新しい排水路が完成しました。明治四十三年十二月二十六日に、その完成を祝って通水式が行われることになりました。三之助はいつものように、つぎはぎだらけの衣服にわらじ姿で、出かけようとしていました。すると、

「三之助、今日のお祝いはあなた一人のものではありません。祖父や父も連れていきなさい。」

と母から、諭すようにゆっくりと言われ、祖父と父の位牌を手渡されました。はっとした三之助は、思わず板の間に頭をすりつけて、何度も何度も母に謝りました。通水式の準備に心を奪われ、祖父や父を式典に連れて行くことを忘れていたのです。

通水式には、県令をはじめ千人あまりの人が参加し、品井沼の排水路の完成を祝いました。通水と同時に、一瞬、会場は静まりかえりましたが、すぐに涙を流したり両手を挙げて喜んだりしている人であふれました。

通水式が終わって、三之助は船に乗り品井沼から排水路を通り、お祝い会場の松島へ向かいました。三之助は、祖父と父の位牌を背負いながら、勢いよく流れる水を、じっと見つめ続けました。

鹿島台町では、今でも三之助の偉業をたたえるために、「わらじ祭り」が行われています。



村長時代の鎌田三之助（鎌田三之助記念館蔵）

鎌田三之助

鎌田三之助は、文久三（一八六三）年に、木間塚村（現在の大崎市鹿島台）に生まれた。鹿島台村長として、品井沼干拓事業に力を注いだ。そまつな身なりでわらじをはいて村のすみずみを回り、郷土の発展のために一生をささげ、その姿から、「わらじ村長」として人々から尊敬と信頼を集めた。

諭す…
本人がわかるまで
ゆっくり教えるこ
と。

位牌…
先祖の戒名などが
書かれた木の札。
仏壇に供えてある
ことが多い。

偉業…
世間の多くの人が
認められるような
仕事ぶり。

佐々木

君五郎

— 植林を進め、
洪水を防ぐ —

君五郎（幼名保吉）は明治六（一八七三）年、古川の呉服商の家に生まれました。保吉は子どものころ、江合川の堤防が切れ、田畑や民家が大きな被害を受ける様子を目にしました。そのすさまじさは心に強く焼きつけられ、どうにかならないかと考えるようになりました。そして、堤防を高くするだけではなく、江合川の上流の山に木を植えれば木々の根が雨水を蓄える。そうなれば、水が一気に川に流れこまないようになり、洪水を防ぐことができるのではないかと考えるようになり、保吉がこのように考えるようになったのは、山地を開墾して果樹園を作った父の影響も少なからずあったようです。



佐々木 君五郎

保吉は、十六歳のころから家の仕事を手伝い、江合川の上流の町や村へ呉服の行商に出かけていました。十八歳になった保吉はいつものように番頭を連れ、鬼首へ行商に行きました。その晩は近くの農家に泊めてもらいました。夕食後、その家の主人とよもやま話をしているときに、山が売りに出されているから買わないかという思いがけない話を持ちかけられました。その日の売上金八十数円を持っていた保吉はすぐにその話にとびつき、こう言いました。「よし買おう。ところで、いくらで売りに出ているんだい。」
今度は主人がおどろきながら、「ほ、本気かい。何でも八十円だそうだが。」

呉服商：
衣類などを売る
商売。

行商：
直接、家々をまわ
り、食品や生活用
品などを売ること。
番頭：
商店のやとわれて
いる人の一番上の
人。

よもやま話：
世間話。

当時の八十円：
現在の百六十万円
ぐらいの価値。

と言いました。話はほとんど拍子に進み、売り主を訪ねた保吉はその晩のうちに山を手に入れました。

古川の家へもどり、集金したお金で山を買ったことを報告すると、

「なにつ、売上金で山を買っただと。相談もなく勝手なことを……。どうせ、だまされたんだろう。」

と、父親は大声でどなりました。保吉は自分の考えを熱心に語りましたが、父親には聞き入れてもらえず、ついには勘当を言い渡されました。保吉はがっくりと肩を落としました。目の前で腕を組んでそっぽを向いている父親におじぎをして、うつむいたまま家を出て行きました。

勘当された保吉は、東京の時計屋で働くことになりました。しかし、保吉は一時も自分の思いを忘れることはありませんでした。ひまさえあれば林業に関する本を読みふけていました。ちょうどそのころ、東京大学の本多静六博士の「治水済民」の話を聞く機会を得ました。講演会に

参加した保吉は、じっと博士の話に聞き入りました。木を切りすぎたり焼畑農業を行ったりして、山が荒れてしまった地域がある。山が荒れると土の保水力が弱まり、洪水などの大災害が起こる。山林を守り木を育てることが川を治めることにつながり、水害から人々を救う方法になるという、本多博士の話は、保吉のこれまでの考えを強く後押しするものになりました。

保吉は目をかがやかせ、自分が進むべきこれからの道について考えました。

東京での生活が六か月をむかえ、十九歳になったころ、母の説得や家の商売が人手不足になったことを理由に勘当は解かれました。このとき、保吉は名を



勘当…
親の意にそぐわない言動に対してしかられ、親子の縁を切ること。

「治水済民」…
植林などをして山を整えることで河川の氾濫を防ぎ、洪水の害から人々を救うこと。

焼畑…
草地や林などで、雑草・雑木を焼き、その焼跡にそばやひえ、大豆などを蒔きつける畑。

君五郎と改めました。帰郷後は呉服商をやめて時計屋を開業し、そのもうけたお金で山林を少しずつ買い集めました。

君五郎が二十一歳のとき、時計屋をやめなければならなくなりました。父親が友人の借金の保証人となったことから、友人に代わって多額の借金を返さなければならなくなったからです。

それを境に、君五郎は自ら山に向き本格的に植林を始めました。二、三人をやとい、苗木を植える作業に集中し、気がつくとい日暮れしていることもありました。あるとき、苗木を植えること自体を理解できないやとい人が、

「こんな木を植えるんですか。いったい、何のために。」

と、納得のいかない表情でたずねたことがありました。しかし、君五郎には植林することの大切さを説明する余裕はなく、早く植えたい一心から、「いいから、だまっておれの言う通りに植えろ。」

と、強い口調で命じたこともありました。そのため、

「佐々木屋の若だんなは頭が変になった。山に木を植えている。」

と村人のうわさになりました。また、わざわざ植林した山を見物に来る者もいたりしました。そのころ、自然に木が育っている山に木を植えるという考えは、受け入れられていなかったのです。ただ一人の理解者は父親だけでした。以前、勘当まで言い渡した父親でしたが、何があっても変わることはない君五郎の強い思いを知り、心から応援するようになっていました。このことが、君五郎の大きな支えになりました。

その後も、植えた苗木に肥料をやっただけでうわさになり、温泉の湯治客までがこの山を見に来ることもありました。君五郎はそんなことなどまったく気にせず、山が売りに出れば買い、杉の苗木を植え続



湯治客…
温泉宿に宿泊など
にきた客。

けました。植林が進めば進むほど苦難も増えました。多くの人をやとつたためには、これまで以上にお金が必要です。家賃や小作料だけの収入では、どこにも足りません。ときには家財を差し押さえられることもありましたが、君五郎の住んでいた古川と植林した鬼首などへの行き来にも苦勞しました。今なら車で一時間半の道のりですが、当時は行くだけで半日かかりました。さらに植林をすると二泊三日の行程になることもありましたが、苗木を背負つての山越えの苦しさは、想像を絶するものがありました。それでも、君五郎は鬼首や鳴子、川渡、中山平など江合川の上流域に次々に山を買ひ求めました。

君五郎は植えた木の様子を確かめるために、久しぶりに山に登ると、眼下に広がる江合川が見えました。おだやかに流れる江合川を見て、君五郎は目を細めました。

君五郎は生涯、初心をつらぬき、杉などの針葉樹約二百万本を植えて山を守りました。森林の大切さを子どもたちに教え、「学校植林の育ての親」とも呼ばれるようになりました。昭和二十八（一九五三）年、財団法人「佐々君治山報恩会」を設立し、所有する山林五百二十二ヘクタールと七千五百立方メートルの美林のすべてを、この会へ寄付しました。君五郎は昭和四十（一九六五）年に九十二歳でこの世を去りましたが、その志は、今も財団の充実と発展のために受けつがれています。

佐々木 君五郎

佐々木 君五郎は、明治六（一八七三）年に、現在の大崎市古川の呉服商の家に生まれた。江合川の洪水を防ぐため、植林による治水の必要性を説き続けた。資金難や作業の困難さを乗り越え、「自分がこの世に生を受けたのは治山治水のため」という信念で事業に取り組んだ。そして、江合川上流におよそ二百万本の杉を植林した。

小作料…

地主から土地を借りて農作物などを育てた人（小作人）が、土地を借りた分について払うお金など。

家財…

家具などの家にある財産。

針葉樹…

杉や松など、一年中、葉が緑色の木。

美林…

美しい林。ここでは、背丈が高く、つばな木々が生えている林。

二階堂

トクヨ

—女子体育を広めて—



教え子と二階堂トクヨ
(学校法人 二階堂学園 日本女子体育大学蔵)

明治三十七（一九〇四）年、二階堂トクヨは、希望に胸をふくらませ、石川県立高等女学校に着任しました。しかし、体育を教えることを命じられ、大きなショックを受けました。学生時代、和歌と読書に夢中だったトクヨは、大好きな国語を教えることを楽しみにしていたからです。号令に合わせてただ体を動かす体育は、トクヨが一番きらいな教科でした。

しかし、教員になったからには、きらいだと言ってはいただけません。しかたなく体育の教員として、指導を始めました。ところが、三か月ほどたったころ、不思議なことに気づきました。運動をすることで、体が弱かった自分が健康で活発になっていったのです。毎日の運動の効果を自分の体で体験してから、トクヨは進んで講習会に参加し、熱心に体育を勉強するようになりました。体操の専門学校出身の外国人宣教師に出会い、ヨーロッパで教えられている女学生用の体操を習うこともできました。一方、休日や夏休み・冬休みは、自分が覚えた体操を他の学校の先生たちに教えることにも力を入れました。いつしかトクヨは、体育の指導力を多くの人に認められるようになっていました。

明治四十四（一九一〇）年、トクヨは、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）の助教授になりました。そして、翌年留学生に選ばれイギリスに向かいました。体育ぎらいだったトクヨが、日本の女子体育の未来を背負うことになったのです。

トクヨの留学先は、マダム・オスターバークが校長を務める名門キングスフィールド体操専門学校

体操の専門学校：
当時外国では、体育の教師を育てるのは、体操の専門学校であった。

宣教師：
キリスト教の教えを伝える牧師。

助教授：
大学の先生。

でした。

「わざわざ日本から、助教授が留学生としてやってきた。」

トクヨを迎えた先生たちは、すでに助教授の資格をもっているトクヨに対して、何を教えればいいのか困ったといえます。そのためマダム・オスターバーグの提案により、トクヨの実力を確かめるためのテストが行われました。「水泳を知っていますか。」「ホッケーやラクロスを知っていますか。」「ダンスを知っていますか。」「マッサージを知っていますか。」「トクヨは次々と向けられる質問に、すべて「知りません。」と答えるしかありませんでした。当時の日本の体育の授業は、先生の号令に合わせて、ただ体を動かすというもので、トクヨもそれ以外の知識はもっていませんでした。

結果はすべて0点。トクヨは、あきれ顔の先生たちにこう言われました。

「いったい、あなたは生徒に何を教えていたのですか。」

トクヨは、黙ったままくちびるをかみしめました。

キングスフィールド体操専門学校での生活は、驚きの連続でした。寄宿舎の部屋はホテルのようにきれいで、そうじしてくれる専門のスタッフまでいるのです。しっかりした体を作るために、午後のおやつや夜食をふくめ、食事は一日五回もとるようになりました。また、動きやすいように工夫されたチュニックという制服も準備されていました。生活のすべてが、よりよく運動するために工夫されていたのです。

トクヨは、このような恵まれた環境の中で、できるだけ多くの運動を学ぼうと思いました。他の生徒の何倍も練習に打ちこみました。特に、水泳の上達ぶりは、まわりが驚くほどでした。実はトクヨは「水泳の練習は一日一回、三〇分」という水泳の授業のきまりをこっそりやぶり、一日三時間以上も練習していたのです。きまりをやぶっていることを知った水泳の先生は怒って、こう言いました。

寄宿舎：

学生がいつしよに生活をする場所。

チュニック：

女性の上着で、長さが腰からひざくらいのもの。ここでは、写真にある上着で運動着とした。

「きまりを守れないなら、水泳の成績を0点にしますよ。」

それに対して、トクヨはきっぱりこう言い切りました。

「わたしが望んでいるのは、水泳の成績ではなく、泳ぎをマスターすることです。わたしには時間のゆとりはありません。水泳以外にも覚えたいことがたくさんあります。早くマスターしたいのです。」

トクヨの熱意に負けた先生は、好きなだけ泳いでいいという許可をあたえました。

トクヨはこの他にも、クリケットやラクロス、ダンスなどたくさんスポーツに触れました。自分たちで作戦を考えたり声をかけ合ったりする運動は楽しく、時間を忘れて体を動かしました。トクヨは、この「運動の楽しさ」を日本の人たちにも伝えたいという思いをもつようになりました。

留学して一年がたったころには、トクヨはキングスフィールド体操専門学校で教えられたことをほとんどマスターしていました。わずか一年の間の成長ぶりに驚き、「天才だ」とトクヨをほめる教授もいたほどでした。しかし、自分が天才でないことはトクヨ自身が一番よく知っていました。

このころからトクヨは、自分の後続く者たちには同じ苦勞をさせたくないという思いを強くしていました。そのために、日本に帰ったら女子の体操専門学校をつくらうと決意したのです。

大正四（一九一五）年に帰国したトクヨは、女性の体育の先生を育てるための国立の専門学校の必要性をうたえ、国に専門学校をつくることを要望しました。しかし、実現はしませんでした。そこで、トクヨは自ら学校をつくることにしたのです。



イギリスの体育の授業（体操）
（学校法人 二階堂学園 日本女子体育大学蔵）

開校までには多くの困難がありました。困難にぶつかるたびに、「知りません」としか答えられなかったころの自分を思い出し、のりこえたのです。

トクヨが「二階堂体操塾（現在の日本女子体育大学）」を開いたのは、帰国してから七年目の大正十一（一九二二）年、四十二歳のことでした。トクヨは、「運動の楽しさ」を教えることができる教員を育てるために、「二階堂体操塾」での授業や寮の生活に、イギリスで学んだことをできるだけ取り入れました。

開校して間もなく、トクヨは、真新しい日本製のチュニックを着た生徒たちに、こう宣言したのです。

「この学校では、チャイムが鳴りません。出席簿もありません。何の資格も取れません。しかし、体育の教員としての指導力をつけて卒業させることだけは、わたしが責任をもちます。」

このときトクヨは、自分を見つめる生徒たちの真剣なひとみの中に、日本の女子体育の未来を見ていました。一年後、ほとんどの生徒が体育教師となり、トクヨのもとを巣立っていきました。彼女たちは日本各地の学校で、トクヨに学んだ「楽しい体育」を広めていったのです。

二階堂 トクヨ

二階堂 トクヨは、明治十三（一八八〇）年に、現在の大崎市三本木の農家に生まれた。助教としての二年間のイギリス留学で、「心身ともに健康な女性を育てる」ということを学んだ。帰国後、現在の日本女子体育大学の前身である「二階堂体操塾」を開設し、女子体育の基礎を築いた。



二階堂体操塾の平均台運動
(学校法人 二階堂学園 日本女子体育大学蔵)

川村 孫兵衛重吉

―北上川の流れを変える―

川村孫兵衛は天正三（一五七五）年、長州（現在の山口県）

で生まれました。孫兵衛が仙台にやってきたのは、二十代の半ばのころでした。若いころから土木の仕事にかかわり、いつかその知識と技術を人のために役立てたいと考えていました。そのようなときに、仙台藩主の伊達政宗に認められたのでした。

孫兵衛は政宗に任せ、命じられるままに鉾山や塩田の開発などに一つ一つ取り組み、やりとげていきました。

政宗の命令により、忙しくあちこちの工事の現場を指揮していた孫兵衛でしたが、この地に初めて来たときから、心に、ある思いを秘めていました。それは北上川の改修工事を必ず成功させ、野谷地から水を引きぬき、田畑に変えてみせるというものでした。広大な野谷地をわがもの顔で流れる川の水に、家や田畑が飲みこまれて困りはてていた人々の姿が孫兵衛の目にずっと焼きついていたのでした。

元和九（一六二二）年、孫兵衛は四十九歳のときに、川の改修に欠かせない柳津と飯野川の間の流れを止める工事を完成させました。ついに悲願であった北上川や追川、江合川の三つの川の合流の工事に取りかかりました。その年には孫兵衛は、家族を伴って釜の地（現在の石巻市）に移り住んでいました。



石巻市日和山の孫兵衛像

野谷地：
広い湿地帯。

しかし、人手や道具が不足していて、工事は思うように進みませんでした。くわで一かき一かきしてほり下げていき、固い粘土のかたまりをもっとで運び上げていたときです。かつぎぼうの後ろ側をかついでいた人夫が小石に足をとられ、ゆらりと体がかたむき、前の方をかついでいたもう一人の人夫を巻きこんで、ほり下げた穴に転げ落ちてしまったのです。

「だいじょうぶか。動けるか。」

「今、手を貸すから動くな。気をつけろ。」

仲間の人夫たちが口々にさげびます。工事になれていた人夫たちもつかれはて、集中力を失っていたのです。やはり無理なことだったのだろうか。まるで東北一の大川が、孫兵衛に自分の流れを変えられるのをこぼんでいるかのようでした。孫兵衛は一心に考えました。つかれきった様子の孫兵衛を気づかした人夫頭が話かけても、孫兵衛の耳にはとどきませんでした。孫兵衛に重くのしかかっていたのは、はかどっていない工事のことでした。工事にはたくさん費用がかかっていました。藩から準備されていたお金は、すでに底をついていました。また、人夫たちのつかれも限界に達していました。困っているはずの地域の住民たちからさえも、改修工事について、「そんなことができるはずがない。」

「ここで生まれ育ったものでもないくせに何を言っている。」

「これまではたまたまうまくいっていただけ。」

という声が出るようになりました。

そんなとき、孫兵衛は、川の流れにじっと目を向けるのでした。

以前、孫兵衛が仙台のお城に行ったときのことです。孫兵衛は工事の進み具合を政宗にたずねられました。「川のつけ替えはどうじゃ。」

孫兵衛は、どろと汗まみれで一生涯懸命に作業する人夫たちの姿を思いうかべました。自分を信じて工事を取

もっこ…
わらを網状に編んで作った土などを運ぶ用具。

り組ませてくれた政宗には、きちんと報告しなければならぬ。しかし、ここで工事がおこなわれていることを話すと、人夫たちに負担をかけてしまうと考えました。

孫兵衛は一瞬、間を置いて、

「はい、このくらいでございませうか。」

と、自分の首のあたりを示しました。

そして数日後、孫兵衛の工事現場を政宗が視察にやってきたのです。政宗は、工事がおこなわれていると感じていたので、

「孫兵衛、たしか、このあたりまでほり進んでいたのだったな。」

と、首のあたりで手を止め、平然と言ひ放ちました。孫兵衛の側にいた人夫頭は青くなりました。

「はい、さようでございました。」

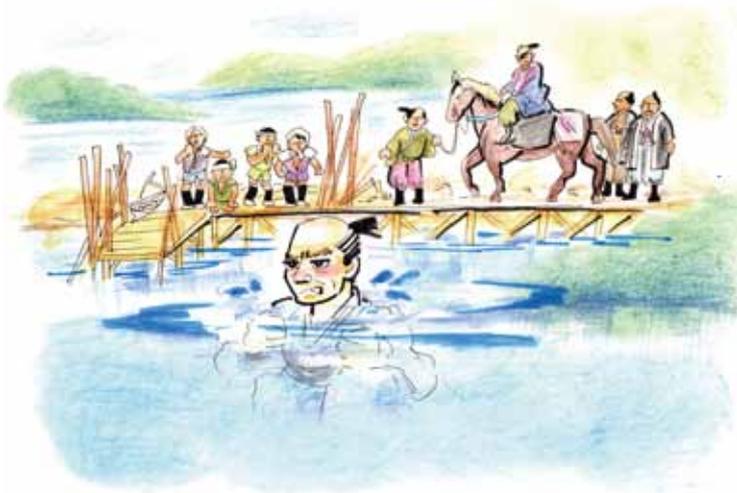
孫兵衛は迷わずそう言うと、川の中へずんずん入って行きました。その様子を見ていた人夫たちは、その場の緊張した空気に息を飲みました。工事はおくられており、首どころかへそのあたりにもなっていないませんでした。孫兵衛は、水しぶきをあげながら川の中ほどまで歩いて行くと、ずんと腰を下ろしました。川面が波立ち、孫兵衛のあごのすぐ下でゆれて光っていました。それを見た政宗は、

「ふむ、そうか。首のあたりであるな。」

と言うと、くいと手綱をとって馬の腹をけり、そのまま仙台城に帰っていきま

した。

孫兵衛は、工事のおくれを人夫たちのせいにすることはありませんでした。また、人夫たちを休ませずに働かせたり体の弱った者をやめさせたり、けがした者に無理をさせたりはしませんでした。それどころか、人夫たちに酒や肴をふるまったり、孫兵衛の自宅の風呂を使わせたりすることもありました。



肴：
お酒を飲むときに
そえる食べ物。

工事が進むにつれて、人夫たちの耳には、工事の費用が足りなくなつて、孫兵衛が金持ちの家にかけ合つてお金を集めまわっているらしいという声も聞こえてきました。一軒では足りず何軒も訪ね歩き、頭を下げているらしいのです。その話を聞き、人夫たちは工事が必ず成功することを信じて作業を続けました。そして、改修工事の全体が見えてくるようになります。ますます人夫たちの作業もはかどりました。それまで孫兵衛を信用していなかった人たちも、工事の成功を強く願うようになりました。

寛永三（一六二六）年、四年の年月を経て、迫川、江合川と北上川の合流とつけ替えの工事が終了しました。ある晴れた日、和澗（現在の石巻市和澗）の土手に立つ孫兵衛の姿がありました。孫兵衛の視線の先には迫川と北上川、そして江合川の合流した新たな川のゆうゆうとした流れがありました。

孫兵衛の工事により、仙北の平野では、野谷地が新田になり、米作りのための水が確保されるなど、安心して耕作できるようになりました。仙台藩ばかりでなく南部藩（現在の岩手県の南部）の城下町盛岡までの船の航行が可能になり、迫川や江合川からもぞくぞくと米俵を山積みにした船が石巻に下りました。集められた米は千石船によって直接江戸に運ばれるようになり、その数は江戸で消費される量の三分の一から二分の一にまでおよんだということです。

川村 孫兵衛重吉

川村 孫兵衛重吉は、天正三（一五七五）年、長州藩（現在の山口県）に生まれた。伊達政宗に取り立てられ、土木工事や鉱山開発、運河の建設の仕事で活躍した。四十九歳のときには、北上川の流れを変えろという難しい改修工事を成しとげた。毎年八月に盛大に行われている「石巻の川開き」は、孫兵衛への感謝の気持ちもこめられた祭りである。

千石船：
江戸時代に、米などを運ぶために使われていた大型の和船。



えられるわたしたち（栗駒山：栗原市）



先人たちが拓いた大地 豊かな実りに支